

## 「札幌市次世代継承事業利用のすすめ」

札幌市立厚別中学校  
教諭 大石橋 計幸

### 1 はじめに

中学校学習指導要領第2節「社会」の冒頭に、第1項「目標」が示されている。その後半には「我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を深め、公民としての基礎的教養を培い、国際社会に生きる民主的、平和的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。」とある。

平和に関する教育について、中学校においては、道徳や総合的な学習の時間でも多くの実践が行われているが、社会科がその中心を担うと言ってもよいだろう。

これまで戦争の悲惨さ、第9条も含めた日本国憲法施行、戦後日本の復興と、教科書や副教材を中心に、時には視聴覚教材も取り入れながら、平和に関して思いを巡らすことができる授業をしてきたつもりではある。

しかしながら、現実として、授業の中で生徒の平和に関する思いをどこまで広げ、深めることができたろうかと考えることがある。

当たり前話であるが、戦後に生まれ、平和な時代に生きてきた私が行う授業である。学生時代、旧満州の黒龍江省哈爾濱の大学で学ぶ機会に恵まれ、長期休業中には南京をはじめ中国各地の博物館などで「抗日」を肌で感じることもできたとはいえ、私の話は実体験ではないがゆえの限界がある。

我々教員は幸いにして、様々な場面で他校でのすぐれた実践例に触れる機会があり、貴重な話を聞くことができるが、昨年、ある先生の言葉が印象に残った。

「生徒達の祖父母が戦争体験をしていない年代になってきた。以前は祖父母や近所の高齢者に戦争体験を聞いてまとめることを2年生での冬休みの課題にし、本人の承諾を得て教材にすることができたのだが。」

戦後65年が経過していることを改めて感じた瞬間であった。

### 2 「平和都市さっぽろ」の取組

平和に関する教育とは、大きく分けて「未来志向型」と「次世代継承型」の2つが考えられる。

前者は、例えば地雷撤去に必要なことを調べたり、国際平和を実現するために日本ができること、自分自身ができることを考えてまとめるなどの学習内容になるであろう。生徒たちとともに平和な未来を創造する一端を担うことができるはずである。

後者は、戦争の悲惨さなどについて語り継いでいくもので、戦争を経験した方から直接お話を伺うことなどが学習活動として想定される。戦後65年が経った現在、次世代に継承していくためには、まさに待ったなしなのである。

さて、札幌市では平成4年に平和都市宣言が行われ、この宣言の理念を広く市民に普及するために様々な事業を実施している。特に平成20年度からは、戦争を体験された札幌市民のお話を聴き取り、記録する事業が各区役所の主催で始まっている。

地域にお住まいの方々の体験は身近なものであり、生徒たちへ語り継ぐことは大変有意義なことである。昨夏、札幌市・札幌市教育委員会から『札幌市民の戦争体験～平和に関する学習資料①～』が発刊された。平和都市宣言の20周年にあたる平成24年度までにさらに聴き取りが行われ、順次冊子化されるとのことである。

この内容は、札幌市のホームページから一話ずつダウンロードできるようになっており、生徒への配付が可能である。授業に取り入れやすい生きた教材が簡単に手に入るようになっていて、これを是非活用したいと思い始めていた頃、私が勤務する厚別中学校に、ありがたい話が舞い込んできた。

### 3 平和講演会が実現するまで

札幌市でキャリア教育という言葉を見聞きするようになってから久しい。本校も、総合的な学習の時間において、2年生が職業体験を実施するようになって3年目を迎えた。幸いにして、近隣の公的機関、事業所の方々の御理解、御協力により、大変有意義な学習の機会となっている。

平成21年11月、本校2年生4名が厚別区役所で職業体験を行わせていただいた際、前述のとおり、各区役所の平和事業が本格化していた中で、室蘭で空襲を経験された佐々木甫さんからの聴

き取りの一部を担当させていただいた。この様子は、後述の平和講演会とともに厚別区役所のホームページに掲載されている。

職業体験のおよそ1か月後、各事業所での体験をグループ単位でまとめたものを持ち寄った発表会を行った。商業施設での体験、接客の難しさ、といった発表が多い中で、厚別区役所での貴重な体験をまとめた生徒たちの発表を通じて、学年全体が、自分たちが生きる平和な時代を当たり前のものとは考えずに、先人たちの努力があって初めて成り立っている平和なのだ、という共通した思いに包まれた。社会科の授業だけでは醸し出せない学びの場である。

本校のカリキュラムでは、2年生の11月は歴史の学習をすべて終える時期である。社会科の授業が土台となりやすい2年生の2学期は、平和に関する学習内容が生徒に浸透しやすい格好の時期であろう。

さて、先ほど「ありがたい話が舞い込んできて」と記したが、この時の職業体験でお世話になった厚別区役所が、聴き取りや記録、限られた生徒によるインタビュー等ではなく、戦争を体験された語り部の方が、学年や全校という単位の生徒たちに向けて直接話をしていただく、という試みを企画されている、とのこと。

時はすでに今年度が始まっていた4月であったが、生徒にとって得るものは大きいであろうと判断して、本校の教務部研修係・総合係が中心となり、全学年での取組とすることを確認し、厚別区役所の担当者と調整を重ね、11月末に総合的な学習の時間の中で「平和講演会」として実施することを決定した。このような講演会を教育課程の中でどのように位置付けるかについては後述する。

本校としてはありがたいお話であると同時に、初めての試みであるがゆえに、どのような形態で実施すればよいのか、教務部内で検討を加えた。その中で、唐突な感じは否めなくても、あえて事前学習の時間を用意せずに、全校生徒にまずは耳を傾けてもらおう、という結論にいたった。

#### 4 平和講演会

平成22年11月30日(火)、講演会当日を迎えた。

この講演会開催の保護者へのお知らせは、11月初旬に書面で行った。保護者に限らず、友人、知人、地域の方々もお誘いください、という案内をしたところ、当日は30名ほどの方々にも御参加いただいた。

網走管内小清水町でお生まれになり、14歳の時に勤労働員で横浜へ行かれた、厚別区内ご在住の住吉シズさんに御来校いただいた。

「私が14歳だった頃」という演題でお話してくださった内容は次のとおりである。

##### 〈戦時中の生活～学校の様子など〉

- 小清水町で6年生ぐらいまでは普通に過ごしました。  
当時の学校はそれに高等科2年があったのですが、そのころから出征した兵隊の留守家族のところへ援農に行くようになりました。  
みんな援農に行ったので授業もなく、昭和17年ぐらいから勉強はほとんどできませんでした。授業がなくても農作業など毎日何かすることがあったのです。
- 農家に行くのは毎日大変でした。2時間も3時間も山奥へ歩いて行って、やっと着いたと思ったらお昼という毎日です。  
それが十二、三歳のころです。畑仕事なんてしたことはなかったけれども、麦刈りなどの手伝いです。働き手はみんな兵隊に行ってしまったら手が足りないのです。
- 援農以外には標茶の軍馬補充部へ行って馬の世話などもしました。  
食料が大事な時代でしたから、農家に行かないときは学校でも菜園をつくって作業しました。農地にできる土地は全て耕しました。
- 冬になると、毎日のように兵隊の出発があったので見送りをしました。冬でも必ず見送りをしなければならなかったのです。そして、今度は遺骨が返ってきました。  
冬にはなぎなたの練習もありました。なぎなたと言ってもわからないでしょうか。時代劇なんかで武士の奥さんたちがこんな長いものを持っているでしょう。あれの練習をしていたのです。ちょうどみなさんと同じくらいの年齢のときです。
- 他には軍事教練もありました。今ではあまり考えられないだろうけど、学校に軍人が入ってくるのです。正常歩はわかりますか。兵隊が足を直角に上げてきちんと歩くでしょう。あれが正常

歩です。その正常歩で一糸乱れずに歩かされました。カーブのときは、真ん中の人は足踏みで、外側は大股で歩いて、きちんと扇の目みたいに歩いていましたね。乱れたら棒なんか飛んできて、叩かれるのです。

- あとは登校時に毎日、天皇に敬礼をしなければいけませんでした。当時の学校には奉安殿というものがあつたのです。学校に入ってすぐの場所の、天皇陛下と皇后陛下の写真を安置しているコンクリートの立派な建物が奉安殿です。昔は起源説といった今の建国記念の日や、明治節といった文化の日には、必ず式典がありました。そういう式のときは必ず奉安殿から写真を出して、講堂に移してから式典をしました。普段は奉安殿から天皇陛下の写真を出すことはめったにないから、必ず学校に入るときには奉安殿に最敬礼をするのです。そして、校舎に最敬礼をして学校に入るのです。
- そして、朝礼のときには「私は天皇陛下の赤子です」と言うのです。「私たちは強い子、よい子です」と言って、「海ゆかば」という歌を必ず歌つたのです。毎日、毎朝です。そして、宮城遥拝をするのです。今から考えたら考えられないでしょう。そして、真珠湾攻撃を仕掛けた日、12月8日には必ず神社参拝です。
- それでも、私たちは当たり前だと思っていたから、毎朝、一生懸命やりました。当時は大人も真剣にそうでしたから、子どもは余計そうでした。

#### 〈軍需工場への動員〉

- 14歳のときに、学校から軍需工場の動員に行くことになりました。学校ごとに男女5人ずつ割当があつて、行きたい人を募集するのです。割当をまっとうしなかつたら、非国民と言われるし、当時の校長先生は苦勞をしたようです。
- 私が軍需工場に行くことに親は反対しました。そのころは、東京空襲が始まつていて津軽海峡を渡れるか渡れないか分からない時代でしたから、もう二度と帰つてこられないかもしれないかと泣いて止めたのです。
- 動員に行く子どもは全道各地から道庁に集まりました。十勝管内や稚内からは来ていないようで、道央、道東から来ていた人が多かつたですね。札幌や石狩の人も来ていました。今の赤れんがの講堂が座る場所もないくらいびっしりになるほどです。みんな中学生くらいの年齢です。そこからそれぞれが全国各地の軍需工場に出発しました。私は横浜の軍需工場に行くことになったのです。
- いざ軍需工事に行くと、そのころは何も仕事がありませんでした。つくる材料がなかつたからです。だから、今考えたら、どうしてあんな仕事も何もないところに14歳の子どもを連れていったのかと思いますね。私が行つた工場は造船所で、船のタービンなどの動力機械の図面をつくつていました。図面は書けなかつたので、実際には図面の整理をしていました。
- 大人は兵隊に行つていたので、工場に大人はほとんどいなくて、大多数が学生でした。大学生もいっぱい来ていたけれども、20歳になったら赤紙が来て大学生もその工場から兵隊に行つていました。

#### 〈横浜での空襲体験〉

- そうして過ごしているうちに空襲が激しくなつて、横浜の元町へ極秘の図面を持って避難することになりました。元町には外国人墓地があり牧師さんなどもいましたから、陸軍も弾が落ちないということがわかつていたのではないかと思います。そして、5月の横浜空襲を迎えました。
- 空襲は、まちが広がつて見える丘の上から見ました。丘と言つてもそんなに高い丘ではなくて、ほんの100メートルもないくらいの場所です。空襲があつたのは天気の良い日の昼間でしたが、空襲の最中は煙がひどくて何も見えませんでした。そしてB-29は空が見えないほど一面に飛んできました。空襲警報が鳴つた瞬間にはもう来ていたので、避難する間もなかつたのだと思います。
- 日本には、迎え撃つ飛行機もないし、下から撃つ弾もなかつたときだから、好き放題に落と

されました。丘の上を縦横無尽にB-29が飛ぶのです。爆弾を積んだ飛行機のお腹を開いて、ボタンを押したらすぐに落ちるようになっているのです。丘の上の周り全部に、これでもか、これでもか、というほど爆弾を落とすのです。そして、爆弾が3列にきれいに並んでいるのです。5列くらいあったでしょうか。その爆弾が飛行機から出ると同時に破裂するのです。そうすると、中からまたこのくらいの爆弾が出てくるのです。その爆弾が油性で、小さな爆弾が破裂すると油性だから人間なんかはひとたまりもありませんでした。油をかぶって、火に覆われたのではないのでしょうか。そういうものは煙で全然見えなかったのです。一面が黒い煙で真っ暗なのですね。そして、オレンジ色の炎です。爆音もすごくて人の声も聞こえなかったです。

- 空襲の後は生々しいですね。もう燃えるものがなくなって、煙も何も自然になくなるでしょう。そのときに、丘の上から見たらすべてものがなかったです。見渡す限り、何もなかったのです。わずか数時間の間ですよ。3時間くらいではないでしょうか。私が丘をおりたのは、まだ明るいうちでしたからね。
- 人なんか一人も見なかったです。生きているもの、動いているものは何も見えなかったです。空襲が終わると同時にぱっとB-29がいなくなってしまうのです。そうすると、解除のサイレンなどは鳴らす人もないのです。それで空襲が終わったなという時点で、すぐに丘をおりたのです。そうすると、運河が人で埋まっていました。炎に追われて、爆弾に追われて逃げ場を失った人たちです。あそこの運河は今でもあるのです。折り重なっていました。本当に生々しいです。湯気が立っているのです。向こうの工場、こっちの工場で、しょうゆが煮立っていたり、みそが煮えくり返っているのです。
- 寮に帰るためには町の中を横切っていかなければいけませんでした。燃えたばかりだから、もう暑いどころではないです。札幌と新札幌ぐらいの距離を、タオル1枚を水でぬらして暑さをしのぎながら、女の子2人と男の子2人で帰りました。
- 焼け野原を通って帰る途中には、逃げ遅れた人の遺体のごろごろとありました。一番目に残ったのは、真っ黒く炭のようになってお母さんが赤ちゃんを抱いている姿です。他にも男だか女だか分からないような真っ黒な遺体がたくさんありました。足を上げて転んだままの人もいました。自転車に乗ったままの姿もありました。空襲警報も間に合わず、逃げる暇なんかなかったのでしょうかね。帰る間、私は生きていた人たちをほとんど見ませんでした。
- 私たちが寮に着いたのは、夕暮れでした。子どもの足で、下駄を履いてですからね。交通網も連絡手段もないので、寮では私たちはもう死んでいるという情報が入っていました。
- 終戦になると、工場の寮は進駐軍に没収されました。私たちは、終戦になった次の日に、女の子に何かあったら親に申し訳ないということで、着の身着のまま、帰されたのです。やっぱり軍の力だと思いましたね。壊れるくらいぎゅうぎゅうの網走行きの汽車に乗せられて北海道に帰ってきました。

#### <子どもたちへ伝えたいこと・平和へのメッセージ>

- 皆さんは、歴史の勉強で戦争について学んだり、テレビや映画なんかで戦争について見たりする機会があると思います。でも現実には、もっと悲惨でした。日本人が死んでかわいそうだったけれども、アメリカの人も死んだ人や捕虜を見ていたらかわいそうでした。
- 実際に南方に兵隊として行った人の中には、明るく話をしているのに、戦争の話になった途端、決して何も言わないで泣いている方が何人もいました。ただ、涙をぼろぼろと流して何も話さない。戦地の話となったら、口をぎゅっと閉じてしまうのです。だから、よほど衝撃的だったのでしょね。日本人同士で大変なことをしてしまったのです。敵を相手にではなくて、日本人同士で虐待をしていたようです。やはり自分でも恐ろしくて言えないのです。そういう話を教えてくれる人もたまにいたけれども、大抵の大人は泣いて言わなかったですね。
- もし、私が生きていた間に戦争が起きて孫が戦地に行ったら、私は切なくて生きていられないだろうと思います。ああいうことされているのだろうかと思ったらね。ああいうことというのは軍隊の中の生活です。大変だったのです。でも兵隊に行くのは嫌だなんて絶対に言えないですか

らね。憲兵が非国民を徹底的に探して銃殺するのです。たまには逃げる人もいました。本当に大変でした。

- 今はこうして笑っていられますが、戦争の事実を決して忘れてはいけないと思うことがよくあります。へらへら笑っていていいのだろうかと思うこともありました。それでも、終戦になると同時に日本は平和を取り戻しました。今の平和があるということは絶対に忘れてはいけないです。日本は多くの犠牲があつて初めて戦争をやめました。だから、死んでいった人たちの魂の叫びは忘れられないと思います。その上に成り立った平和です。皆さんの世代には遠い世界の話かもしれませんが、本当に忘れないでほしいと思います。

およそ30分間、生徒たちは終始神妙な面もちで、住吉さんの話に聞き入っていた。本校生徒と同年代の、当時14歳だった少女の体験談に感じるところは少なくなかったのである。

いくつか生徒からの質問に答えてくださった後、代表生徒がお礼を述べて閉会となったが、ここで印象的だった住吉さんの言葉を紹介する。

- ・ 終戦を迎えた時に何を思いましたか。  
「戦争に負けた悔しさよりほっとした気持ちだった。安心したことをよく覚えています。」
- ・ 私たちに一番伝えたいことを改めて教えてください。  
「皆仲良くしてください。友達同士、そして生徒の皆さんと先生方も仲良くしてほしいです。」  
「戦争を体験したことで、平和の大切さを知りました。そして皆が仲良くすることの重要性を知りました。」  
「孫の時代まで平和が続くように願いながら生きてきましたが、それが現実となつてうれしい限りです。」  
「皆さん、周りの人たちと仲良くしてください。」

## 5 講演会の成果として

### (1) 生徒の感想より

生徒に感じたこと、考えたことをすぐに書き留めさせることは、様々な面から有効であると考え、講演会終了直後、全校生徒に思いを自由に綴ってもらった。

以下、私が担任をしている学級の生徒が書いたものから抜粋したものである。

- ・ 戦争は悲惨なこと。悲劇を繰り返してはいけない。
- ・ 「日本が戦争に負けてよかった、負けたからこそ今の平和がある」という言葉の重みを感じた。
- ・ 平和な時代に生まれたことは幸せなことである。
- ・ 戦争を批判しただけで非国民扱いされた当時は恐ろしい。
- ・ 産めよ増やせよ、という感覚はおかしいと思う。
- ・ 聞いているだけで辛く悲しい話ばかりだったがこの講演会は貴重な経験となった。
- ・ 戦争は絶対にダメ。平和が一番。
- ・ 一人ひとりの気持ちが豊かになり、皆で協力し信頼し合える世の中になればもっと平和になる。
- ・ 65年前、私と同じ14歳の女の子がこんな辛い経験をしたなんて。
- ・ 戦争を知らない世代の私達も伝え聞いたことをこれから生まれてくる人たちに伝えるべき。
- ・ 今でもはっきりと覚えている歌があることに驚いた。
- ・ 多くの人が亡くなり、川が血で赤くなったなんて信じられない。
- ・ 歴史の授業で学習した戦争について実際に体験した方の話は想像以上に辛いものだった。
- ・ 日本はいつまでもこの辛い過去を背負い続けなくてはいけないのだ。
- ・ 終戦から65年経ったがこの歴史をいつまでも忘れてはいけない。
- ・ 北海道の女子中学生が横浜の軍需工場に行かされたことに驚いた。
- ・ とても勉強になった。戦争の惨たらしさを再認識した。
- ・ こんな時代に生まれたとしたら自分には何ができたのだろう。
- ・ 私の祖父母も戦争を経験しているが当時は幼かったはず。とても怖い思いをしたのだろう。
- ・ 当たり前過ぎていく毎日の生活が平和そのものである。

このように生徒たちが書いた文章は、すべて素直な気持ちで綴られているように感じとれた。住吉さんが語ってくださった具体的な事例の中でも特に印象に残ったことに対して、これまた具体的な感想を書いた生徒がほとんどであった。そして、現在の自分自身の生活と比べての感

想も多く書かれていた。

普段の授業や道徳、学活その他の場面で、生徒たちが書いた文章に目を通す機会は多いが、今回は文章の量が格段に多くなっていたことは間違いない。

生徒たち自らが自分自身の言葉で多くのことを書き記すことができた講演会だったのである。

全校生徒が綴ったものを全校体制で活用する、というところまではできなかったが、社会科の担当教師が目を通して授業に活用し、学校便りや学年・学級通信に載せるなどの事後の取組を行うことはできた。

## (2) 生徒のアンケートより

札幌市教育委員会のホームページに、昨年度、向陵中学校佐久間勇史先生が平和に関する教育の実践研究授業として行った、2年生の道徳の授業の学習指導案が掲載されている。

その授業は、先に触れた二つの方法のうち、未来指向型の平和教育を意識されたそうだが、授業の前に生徒にとってアンケートの結果が授業の導入で使われている。

### ○「平和＝(A)のない状態」(複数回答)

- |        |          |                    |
|--------|----------|--------------------|
| ・戦争(8) | ・自己中心的   | ・独裁者、暴君、悪人、悪意のある戦争 |
| ・争い(8) | ・ムダな争い   | ・マスコミ              |
| ・差別(2) | ・世の中のけがれ | ・麻薬                |
| ・格差(2) | ・殺人      | ・不満                |
| ・悪(2)  | ・外からの恐怖  | ・スリルとサスペンス         |

### ○「平和とは(B)である」(複数回答)

- |                     |                    |
|---------------------|--------------------|
| ・幸せでいられること(3)       | ・理想の世界             |
| ・世界の人たちが望んでいること(2)  | ・哲学                |
| ・みんなが笑っている世界(2)     | ・心から安心できること        |
| ・平等な世界(2)           | ・命をおびやかされる心配のない状態  |
| ・みんなが楽しい(2)         | ・人間が人間を受け入れること     |
| ・人を傷つけるものがない世界(2)   | ・地球が安定している         |
| ・何も起きないこと           | ・みんなが自由であること       |
| ・私たちが目指すべき世界        | ・自由をそれ以上求めようとしないこと |
| ・人々が愛を持って協力し合う世界のこと | ・みんなほのぼのとしている      |
| ・よいこと               | ・問題がひとつもないこと       |
| ・苦しみがなく生活できること      |                    |

私もこれをそのまま使わせていただき、今回の平和講演会後に、学級の生徒に書いてもらった。結果は次のとおりである。

### ○「平和＝(A)のない状態」(複数回答)

- |         |          |       |
|---------|----------|-------|
| ・戦争(27) | ・紛争(2)   | ・爆弾   |
| ・核兵器(6) | ・人種差別(2) | ・拳銃   |
| ・喧嘩(4)  | ・殺人      | ・戦車   |
| ・争い(3)  | ・苦しいこと   | ・言い争い |
| ・兵器(3)  | ・不景気     |       |
| ・差別(2)  | ・貧困      |       |

### ○「平和とは(B)である」(複数回答)

- |                  |                  |
|------------------|------------------|
| ・食べられるものがあること(6) | ・家があること          |
| ・幸せであること(6)      | ・今               |
| ・平等であること(3)      | ・安心して暮らせる毎日      |
| ・笑顔でいられること(3)    | ・友達と話をすること       |
| ・普通に暮らせること       | ・暇でいられること        |
| ・争いが起きないこと       | ・いつもと同じであること     |
| ・自分のやりたいことができること | ・勉強しなくてもよい世の中のこと |
| ・皆が仲良くできる        | ・昼寝がゆっくりとできること   |
| ・家族と過ごせること希望     | ・一日三食食べられること     |

- ・遊べること
- ・心配事がないこと

- ・束の間の休息のようなもの

佐久間先生のアンケート結果と単純に比べてはいけないと思うが、ここでは敢えて比較させていただく。

今回の講演会で貴重なお話を聞くことができた本校生徒38名中27名、実に70%以上が、平和とは戦争がない状態、だと考えている。向陵中学校の2年生と比べて、本校の生徒は住吉さんの戦争体験のお話を聞いた直後であるから当然といえば当然のことであるが、この結果が何より、講演会が大変有意義であったことを意味しているのではないだろうか。

私たちの国で70年ほど前に現実として起きていたこと、私たちが暮らす日本という国がアジアの中で、世界の中で、どのような歴史を刻んだのかということに素直に思いを馳せることができた意義は大変大きい。

さらに、私たちが暮らす札幌にお住まいの、戦争を体験された方の生の声は、生徒たちにとってより身近に感じられるに違いない。

社会科を担当している私は、ヒロシマ、ナガサキといった内容を学習する際、自分なりに工夫をしているつもりだが、生徒たちの様子を見てみると、やはりどこか他人事で、北海道とは遠い西日本での、遠い昔の出来事、という感じを受けているように思う。そのような生徒たちの受動的な姿勢を確実に能動的なものへと変化させ、より身近に感じさせることができたのである。

また、アンケート結果から、多くの生徒たちは現在の生活が平和そのものと感じているのである。とかく当たり前のことと感じてしまいがちだが、食べ物があり、家があり、皆が仲良く、笑顔で、平等で、平凡に暮らしている今が、まさに平和なのだ、生徒たちは感じているのだ。

平和について学ぶことは、普段当たり前のように感じていることや、何気なく過ぎていく時間が、幸せなこと、平和であることなのだ、ということに気がつき、自分を支えてくれている人やものに対して自ら感謝の気持ちをもつきっかけになるのではなかろうか。そして、やさしい心、仲間を思いやる気持ちが芽生え、集団の中の一員としての意識も高まる。

少し大げさかもしれないが、平和について学ぶことは、情操面での成長にも好影響をあたえることがわかった。

## 6 講演会を終えての課題

いくつか前述したが、ここで講演会を終えた本校の課題を整理したい。

現在(平成23年2月)、各校ともに校務、学年、教科、総合的な学習の時間など、さまざまなことに関して年度末の反省を行い、次年度の体制に生かしていく話し合いが行われている時期である。

本校では、簡潔に申し上げると、先の平和講演会は大変な有意義な機会となった、という共通認識を再確認した。しかし、平和に関する教育をいかに継続して実践していくのか、十分な討議を行う時間はなかなかとれないのが現状である。やはり、社会科がその主翼を担うことになるであろうと個人的には考えるが、そのことは後で述べる。

本校の教師が校内体制で研修しようとして掲げている共通テーマは、平和に関する教育とは少し遠いところにある内容で、数年間継続するものを設定している。また、総合的な学習の時間も、学年ごとに生徒の発達段階をふまえてテーマを設定しており、今年度は平和に関する教育とうまくリンクするようなテーマではなかった。

それらがすべての理由にはならないだろうが、今回の講演会は単発的な感じとなったことは否めない。

さて、第一の課題は、今回のような講演会を教育課程の中でどのように位置付けるか、である。

昨年度の職業体験よりお世話になっている厚別区役所から大変ありがたいお話をいただき、平和講演会の開催にいたったことはこれまで述べてきたとおりだが、総合的な学習の時間におけるテーマが例えば、「地域を知る」、「先人の苦労を知る」といったものであれば、平和講演会は総合的な学習の時間の中に上手に位置付けることができるであろう。

そうであれば、事前学習、講演会、事後学習、さらに条件が合えば生徒たちによるまとめの発表会も実施、というカリキュラムを組むことができるだろう。

本校は、今回の講演会では敢えて事前学習の時間を設けなかった。このことがかえって、生徒たちが講演会の話に新鮮で素直な気持ちで耳を傾ける一因になったかもしれないが、総合的な学習の時間の中で講演会を実施するのであれば、事前、事後の学習も含めた一連の流れをつくりたい。

では、道徳ではどうだろうか。平和に関しては、道徳の内容項目4-(10)で扱うことになっており、講演会の設定はさほど難しくないだろう。

ただし、道徳という授業の性質上、ある程度は授業の中で、生徒たちの心情の動きをとらえ、意見交流もさせたい。講演会という方法も悪くないが、例えば、戦争を体験された方をゲストティーチャーとしてお招きし、我々教師も一緒になって授業を作っていくというのもひとつの方法であろう。事前、事後学習も、すべて道徳の授業で行うことは可能だろうが、時数的には難しいかもしれない。後述する内容と関わってくるが、戦争体験のお話を聞くのは学年の生徒全員が一堂に会しての道徳の授業、ということになるはずである。

このように、平和に関する教育は、総合的な学習の時間や道徳などにおいても位置付けられるものの、平和に関する教育は、教科としての社会科が担うことが一番適しているように思う。冒頭に引用した学習指導要領における社会科の目標の一つとして、「平和的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」と、正に示されているからである。

第二の課題は、講演会後に生徒たちが書いた文章を財産として生かしきれなかったことである。

繰り返しになるが、今回の講演会で全校生徒が感じたことを、一部の社会科の授業や学級通信などで紹介することはできたが、それらを十分な時間を確保して取り上げることはできなかった。

事前、事後の取組も含めて、平和に関する学習を深めるためには、歴史の単元、とりわけ戦争が起きていた時代を学習する2年生を対象に、社会科の授業の中で扱うことが効果的と思われる。事前、事後の学習は各学級の社会科の授業の中で行い、個々の生徒が綴った文章や、班単位でまとめたものを社会科から全校に発信するのがスムーズな流れだと思うがどうだろうか。そうすることで、生徒たちひとりひとりが感じたことを埋もれさせることなく、さらには他学級、他学年の生徒たちの目に触れさせることができる。

ただし、先人の苦勞を聞くその時間は、学級単位に設定するのは難しい。戦争体験をされた方に、学級の数だけ同じお話をさせていただくのは大変忍びない。時間割の面で乗り越えなければならぬこともあろうが、2年生全学級が社会科の授業で体育館に集まる、という方法が望ましい。

先ほど、総合的な学習の時間の中に平和に関する教育を位置付けることは少々難しいかもしれない、と述べた。これに矛盾するかもしれないが、総合的な学習の時間では、まとめる力、自分の考えを発信する力を育てるというねらいもある。横断的な、総合的な、という言い回しをよく耳にするところだが、社会科の教師が平和に関する学習をリードしながら、まとめたり発信したり、という時間は、年度当初の学年での計画段階から総合的な学習の時間の数コマを充当しておくのも一法である。

第三の課題は、戦争体験をされた方の貴重なお話を聞く生徒の対象をどうするか、である。すでに述べている理由からいっても、2年生がその対象となるべきであると考えている。

今回の講演会では、本校は1年生から3年生までの全校生徒が住吉さんのお話を聞いた。仮に、毎年語り部の方をお招きできたとして、毎回全校生徒を対象としても、さほど効果が上がらないであろうことは容易に想像できるからである。

## 7 おわりに

ご縁があって平和講演会を実施できた厚別中学校に勤務するひとりとして、一番申し上げたいことは、今まさに、札幌市次世代継承事業を利用させていただくべき時である、ということである。

冒頭で申し上げたとおり、戦後65年が経過したが、札幌市では今、戦争を体験された方々からの聴き取りが行われている。まさにタイムリーなのである。

本校(社会科)の今後の取組のために、また僣越ながら、札幌市次世代継承事業を新たに利用したいという方の目に留まればと思い、先日、厚別区役所市民部総務企画課広聴係小松希さんにお会いし、お話を伺った。お話の内容は以下のとおり。

- ・札幌市次世代継承事業とは、貴重な戦時体験を後世に残すため、戦争体験者のお話を聴き取り、子どもたちに語り継いだり、冊子にまとめたりして、次の世代へと引き継いでいく取り組みである。
- ・平成23年度までに全市で100人、各区で10人から聴き取るようになっており、さらに小中学生がその戦争体験を直接聴く機会を設けている。
- ・厚別区では「聴き取り」がおよそ順調に進んだので、これからは「伝える」ことを重要視していきたい。
- ・今回、中学校としては初めて厚別中学校で講演会を行った。中学生は詳しい歴史の学習を終えているせいか、真剣な表情で話を聞いていた姿が印象的だった。
- ・平成21年2月、読者が思い出の集合写真と当時のエピソードを投稿する北海道新聞の「懐かしアルバム」というコーナーに掲載されていたのが、今回、講演をしてくださった住吉さんだった。厚別区ご在住ということで、区役所から連絡をとり、聴き取りを行い、中学校でもお話をして



いただけることになった。

- ・厚別区では、今回の住吉さんのように新聞に投稿された方や、老人クラブの会報誌に寄稿された方などを中心に連絡をとり、聴き取りや小中学校でのお話をお願いしている。こういった方々は、御自身の戦争体験を積極的に伝えたいと思っている方が多く、札幌市の次世代継承事業にも前向きに御参加いただいている。
- ・対象が全校生徒、学年、学級と様々な要望もあるだろうが、区役所が語り部の方々と学校の間に入り調整するので、ご興味がある学校は是非連絡をいただきたい。
- ・また、終了後に生徒たちが書いた感想文を渡すなどして、語り部の方にも「戦争体験を語ってよかった」と思っただけのように留意している。
- ・多くの学校からお気軽にお問い合わせをいただきたい。

小松さんをはじめ、多くの方々が札幌市次世代継承事業に御尽力されていることを改めて感じたのだが、同時に、190万人都市札幌は恵まれている、とも感じた。大都市札幌だからこそ、100名もの方々からの聴き取りが可能になるのであろうし、その貴重な戦争体験のお話は生徒たちや我々教員の手がすぐに届くところにある。

平和に関する学習の教育課程への位置付けについては前述のとおりであるが、まずはこの事業を利用させていただく、ということをも最優先に考え、ねらいや実施上の条件等に応じて教育課程に適切に位置付けていくとよいのではないかと考える。なぜならば、この事業は「待ったなしの、タイムリーな」だからである。生徒たちが多くのこと学ぶ絶好の機会になるはずだからである。

先月(平成23年1月)には、白石区北都中学校で2年生の道徳の授業として講演会を開催したそうである。このような講演会が今後多くの中学校にも広がっていくのだろう。

さて、先ほどふれた向陵中学校佐久間先生の学習指導案には、参考文献から抜粋された文章が載っている。

- ・平和の概念
  - ～消極的平和…暴力や戦争などの直接的暴力がなく秩序が保たれた状態
  - 積極的平和…構造的暴力がない状態
- ・暴力
  - ～直接的暴力…戦争やいじめのように暴力の原因がはっきりわかるタイプ
  - 構造的暴力…飢え、貧困、差別、環境破壊、教育や医療の遅れなどのように、人間の能力が花開くことを阻む社会構造の中に潜んでいる原因
  - 文化的暴力…暴力を助長したり正当化する文化の有り様

平和＝戦争のない状態、というレベルにとどまらず、飢えや貧困という日本だけではない、グローバルな問題の解決も平和の実現には欠かせない要素のひとつである、ということにまで思いを馳せることができる授業づくりに留意していきたい。

また、戦中札幌市でも空襲があり、お一人がお亡くなりになっている。今回は住吉さんからは主に横浜空襲の体験を教えていただいたが、札幌市にお住まいの語り部の方々が、戦中の札幌市についてのお話もされているようである。

今後は地場の教材の研究、開発につながる勉強も始めたいと考えている。